

□ 作曲

石塚潤一

2021年は、新型コロナウイルスの感染爆発とともに始まった。2020年末より増加していた新規感染者数は、1月7日には全国で7643人、東京都内でも2520人となり、一都三県に緊急事態宣言が発出された。1月13日には、宣言は11都府県へと拡大され、結果として、特に東京都内においては、1月8日から3月21日、4月25日から6月20日、7月12日から9月30日が緊急事態宣言下であり、この宣言下で東京オリンピック・パラリンピックが開催されるという、なんとも異常な一年となった。

感染は、さっそくコンサートの開催に影響した。ただし、最初の緊急事態宣言が出された一昨年の4～5月とは異なり、会場定員を（たとえば半分に）減らすことにはなっても、中止することなく公演が行われるケースが多かった（但し例外はあって、4月25日から5月11日に予定されていた公演については、原則無観客で行うよう要請があった）。これは、最初の緊急事態宣言から10か月を経て、感染拡大経路についての知見が蓄積されたことによるのだろう。ホール内は飲食禁止。観客全員がステージ方向をみてお互いに対面せず着座し黙って鑑賞するクラシック音楽の鑑賞スタイルは、感染リスクが相対的に低いものと判断された。ただし、海外から演奏家を招く場合には、入国に際して水際対策のため原則14日の隔離が必要で、この隔離期間をとることができず、出演者や内容を変更せざるを得ないケースがある。特に年末には、オミクロン株の流行に際して検疫が急速強化された影響で、予定されていた演者が来日できず、中止、あるいは演奏者の差し替えとなる例が増えた。

一例を挙げよう。東京オペラシティ主催の現代音楽祭コンポーザムは、一昨年5月の回が開催できず、昨年1月へ延期されていたが、この延期日程についても、テーマ作曲家のトーマス・アデス、ヴァイオリンのリーラ・ジョセフォウィッツは来日できず、アデスとジョセフォウィッツのデュオコンサートは中止に、指揮に沼尻竜典が、ヴァイオリンに成田達輝が代演にたち作品展を開催（1/15）、武満徹作曲賞は会場と作曲家をリモートで繋ぐことで開催された（1/19）。コンポーザムは、例年通りの5月にも、テーマ作曲家にパスカール・デュサパンを迎えての回が開催されたが、こちらもデュサパンの来日は難しく、演目と出演者を差し替えて作品展を開催（5/27）。武満徹作曲賞も、1月と同様リモートでの審査となり、根岸宏輔が1位の栄冠に輝いた（5/30）。

こうした代演で実力を知らしめた存在もあった。その最たる例が指揮／作曲の杉山洋一で、上述のデュサパンの作品展に加えて、NHK交響楽団のMusic Tomorrowにも出演し、間宮芳生、西村朗、細川俊夫を好演した（6/22）。「プロオケ定期を振るレベルの指揮活動を行うコンテンポラリーな作曲家」という存在が、我が国には長く存在しておらず、このことが楽壇の現代作曲家に対する評価を歪めているくらいがあることを考えれば、その活躍には大きな期待が持てる。なお本年、N響が贈賞する尾高賞は、コロナ禍に伴って新作の初演数が少なかったこともあり、選考そのものが行われなかった。

かつて、オリンピックには芸術競技があり、1912年のストックホルムから48年のロンドンまで、計7回が開催されていた。その後のオリンピックにおいても、各国の組織委員会はオリンピック期間中に芸術展示を行わなくてはならないと、オリンピック憲章に明記されている。よって、1964年の東京オリンピックでは、今井光也《東京オリンピック・ファンファーレ》、古閑裕而《オリンピック・マーチ》といったお馴染みの楽曲のみならず、

開会式では團伊玖磨《オリンピック序曲》、黛敏郎《オリンピック・カンパノロジー》が披露され、さらには、オリンピック開催期間中の芸術展示の一環として行われたNHK交響楽団の4回に及ぶ特別演奏会で、黛敏郎《音楽の誕生》、入野義朗《交響曲第2番》、武満徹《テクスチュアズ》、三善寛《管弦楽のための協奏曲》が演奏された。オリンピックが単なるスポーツイベントではない所以がここにあるはずだが……。今回の東京オリンピックは、芸術音楽の創作という観点からは、ほとんど見るべきものがなかった、という点を記録に留めておくべきだろう。

本年後半の芸術活動については、文化庁の令和2年度第3次補正予算事業として開催された、AFF（ARTS for the future）コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業、の存在感が大きかった。この助成には、従来の芸術文化に対する助成とはケタ違いの予算がつき込まれ、それゆえに昨年後半の芸術音楽の世界に、AFFバブルともいうべき状況を作り出した。

学術の世界では、しばしば「選択と集中」について話題になる。これを推し進める側の論理はこうだ。公的資金で学術を支援する際、優秀な人材や見込みのありそうな研究をピックアップし、優先的に手当てすれば、効率的な支援が出来る。しかし、これは「当たる馬券だけを効率よく購入すれば競馬で儲けられる」レベルの愚鈍な見解である、当の学術に関わる多くの識者によって指摘されており、現状、学術の衰退は甚だしい。

日本の芸術、特に音楽に対する公的助成は、学術に対するそれよりさらに貧しいもので、必然的に「選択と集中」を行わざるを得ない状況にある。公的助成の獲得の競争は極めて激しく、特に若手に開かれてはいるとはいえない。加えて、昨年には、比較的先鋭な音楽活動にも理解を示す助成団体の一つであるアサヒグループ芸術文化財団が、次年度の助成事業を停止する、という驚きのニュースもあった。AFFによる大きな助成は、この「選択と集中」と逆行する流れを音楽界に齎したことを特筆すべきだろう。

この成果として2例を挙げる。まずは、西澤健一のオペラ《記》の、管弦楽伴奏による舞台公演。西澤健一は、調性的な語法による諸作で知られる作曲界の中堅だが、上で述べた通り、従来の枠組みでは、西澤のような中堅作曲家が自作オペラを上演するに必要な助成を受けることはほとんど望みえない。AFFの助成は、公募の開始が4月であるにも関わらず年内の実施が条件というタイトなものであったが、西澤の企画が巧みなのは、この《記》は室内楽伴奏版が先行して作曲されており、これに出演したキャストをそのまま出演させることで、オペラのような本来膨大な準備時間がかかるプロジェクトを短期で形にし、助成の対象期間中に成果を上げることができた点にあらう。

もう一つは、若手作曲家の団体Cabinet of Curiositiesによる年末の2公演（12/27,12/28）。世界の創作の一線では、現在、室内オーケストラでの作品が数多く作曲されている。管弦楽は、高精度なアンサンブルを求めるには大きすぎ、現実的に十分な練習日程を組むことも難しい。よって、管弦楽よりコンパクトだが、楽器数も多い室内管弦楽に焦点が集まり、海外ではアンサンブル・アンテルコンタンポラン（8月には来日もした）、アンサンブル・モデルン、クラングフォーラム・ウィーンといった団体が活動している。ただ、日本においては、これらに相当する団体がほとんどなく、そのレパートリーは実演で聴くことが難しいのが実状である。今回、AFFの助成によって一夜限りの室内オーケストラが組織され、そうしたレパートリーの一部を聴けたことは、上の西澤オペラと併せて、「選択と集中」の逆を行くことで、日本の音楽界を活性化させる可能性を示したといえよう。

なお、昨年は、尾高惇忠（2/16）、すぎやまこういち（9/30）、島岡譲（9/30）が亡くなり、海外からは、チック・コリア（2/9）、クリストバル・アルフテル（5/23）、フレデリック・ジェフスキー（6/26）、レイ・アンドリーセン（7/1）、レーモンド・マリイ・シェーファー（8/14）、ミクス・テオドラキス（9/2）、ルイス・デ・パブロ（10/10）、アルヴィン・ルシエ（12/1）の訃報も届いた。